身体（からだ）と ことば

そのだ　ひさこ

昨年は、日本列島のあまりの自然の暴威・風水害の激しさに言葉を失い、いじめによる自殺や後を絶たない幼児虐待(死)に絶句した1年…。さらに、38年ぶりに来日したフランシスコ教皇の核廃絶への熱い訴えが唯一の被爆国・日本列島をかけめぐり、2019年が閉じた。

自然も人間も…まるで旧約聖書の『ノアの箱船』(神が40日、40夜豪雨を降らせつづけて、人間では誠実に生きたノア一族のみと、生きもののあらゆる種をひとつずつ巨大な箱船に積みこんで、地上の他の生きもののすべてをほろぼした話)のように、滅びにいたる道をすすんでいるかのような思いが一瞬、心をよぎる。

人間の英知の結晶である言葉はあふれ、電子機器類も地球をかけめぐり、文化も科学も想像を絶するほど進んでいる。このような社会でも、自然は容赦なく暴威をふるう。人間の命は、自然の暴威だけではなく、人から発せられた暴力的なことばによって、なぜいとも簡単に失われていくのだろう。どんな特効薬もなく、うなだれてしまうわが身。それでもどんなにもあきらめきれず最後の希望の火のように身体のなかから湧いてくるもの、それは『生きたことば＝心に響く言葉』である。私たちの生命はたかが100年くらいだが、『生きたことば』は数百年、数千年の時をこえて今も生きつづけている。過去の言葉だけではなく、そういう『生きたことば』を発しつづけていた方々に、今までの人生のなかで、私は何人もお会いした。

人は個人も、国家もエゴの塊であることは免れないが、エゴ100％になれば、人間も国も滅びてしまう。その人間を変えるのは『教育・啓発』しかない。そして、教育の最大で、最後の商売道具は「言葉」しかないのである。「いじめはいけない！」と言わない教育はない、教員はいない。けれど、そう言っても、言っても、後を絶たない現実がある。それはその言葉が、相手の胸にストン！と落ちない、ドン！と届かないからである。こう言っていても、私自身が、どんな言葉が生きた言葉なのか、わかっているわけではない。ただ、生涯『生きたことば』を発することを求めつづけているというだけである。人の身体は肉の塊であるが、人は単なる肉の塊ではない。自分の意識や言葉は成長のなかで、肉の塊の自分をながめ、それがどんな色や姿をしているかを発信して自分に修正を加えることができる。それを成長というのだろう。20代のころ、心身を閉じていた私は、自分自身に向かって言葉を発しはじめたことで、少し起きあがることができた。

言葉は伝達の道具だから、どんなウソもいうことはできる。けれど、自分の実態・正体とそぐわない言葉は相手に響かないし届かないと思う。言葉は『生きもの、生もの』だから。

●**TUNAGU II とは**　人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えるために、そのだ ひさこ先生(福岡県人権研究所副理事)に執筆していただき、偶数月1日号に掲載しています。タイトルの「TUNAGU」には、人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐなど、「共生」と「人権」の時代の到来を願う歴代の執筆者の思いが込められています。

●**問い合わせ先**　教育政策課　人権・同和教育担当

問い合わせ先で電話番号を掲載していない課・担当などは、市役所本庁 ☎(923)1111 にお願いします。